

くる。気圧は上るときはゆっくり、下るときは急という性質がある。大体上るのに20時間かかったとすると、下るときは10時間位というのが1つの目安である。

8. 有住直介(気象庁予報課): 上層天気図の利用法
上層気天気図の見方と解説

昭和37年はこの他、以下に述べる研究会例会が開催された。

○第11回山の気象研究会例会

昭和37年9月14日(金)午後6時
気象庁第1会議室

1. 夏の北アルプスの天気分布
日大山岳部OB 菅原省司
2. 山岳気象放送について 気象庁 中村 繁
3. 文献紹介「冬季 Milešovka における粗水の形成について」
気象庁 奥山 巖
4. 超高層天気図の話 気象庁 大井正一

○第12回山の気象研究会例会(雪崩遭難体験者を囲んで)

昭和37年11月30日(金)午後5時

気象庁第1会議室

1. 北ア涸沢の雪崩 日大山岳部OB 菅原省司
2. 北ア北鎌沢の雪崩 専大 杉沢博明
3. 35年11月の富士山の雪崩
元アルピニスト教室 和田達雄
東京理科大 竹原祐爾, 百瀬常剛
慶大医学部 和田孝雄
4. 討論会

○第13回山の気象会例会(今冬の遭難の検討)

昭和38年3月8日(金)午後6時
気象庁第1会議室

1. 38年正月の気象
(1) 南アの気象 富士重工 菊地和夫
(2) 八方尾根の気象 気象庁 田中正一, 増田次夫
2. 今冬の遭難と気象 気象庁 官内駿一
3. 富士山のデーターの使い方 気象協会 大塚竜蔵
(文責, 奥山)

九州支部だより

気象懇話会順調に発足知識の交流に寄与

学会支部と福岡管区気象台との共催として、“気象懇話会”が正式に発足したのは5月31日であった。この動機については、“支部だより No. 15”に掲載されたとおりであるが、さらに同誌の“気象学全般の広報を望む”と題した沢田理事の論説の中にも同じような主旨が述べられている。31日福岡管区気象台の台長室で初めて気象懇話会を開いたところ、予期以上の人が集り、会員はあとからの追加もあって現在33名に達した。この会のおもな内容である文献紹介については、原文または訳文のプリントを事前に全会員に配布するようにしたので、討論がかなり容易になった。まず、この会の推進者の一人である土井理事によって文献紹介が始められた。

その後、回を重ねるにつれて、この会もようやく軌道

に乗った感じで、現在まですでに3回の催しがあった。また、会場は気象台にかぎらず九州大学でも行なった。このことは会員の親睦、交流という点でも大いに役だっているようである。特に、第3回の催しのあとでは、沢田理事の説明で理学部の大気モデル実験室を見学するなど、思わぬ機会に恵まれ喜ぶ人もあった。また、今まであまり気象台に行くことのなかった人は、この機会を利用して気象資料を写したりしていた。

懇話会は毎回活発な討論が行なわれたが、これまでの文献はいくぶん程度の高いが多かったせいもあってか、また討論は会員全体に十分納得できるまでには至らないようである。また、紹介者のプリント作成に費やす労力もかなり負担になっている。将来はこのような点で少しずつ改善してゆく必要を感じている。

(360頁よりつづく)

5. 朝日賞に関しては今回は見送る。
6. 秋季大会中今井理事がニュージーランドにおけるWMOの熱帯気象シンポジウム出席不在のため神山理事が代行する。